

「へりくだる」

### ◎イエスの前に現れた人

イエスが弟子たちと共に歩いていると、1人の女性が現れて叫びました。

「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています。」この声を聞いたとき、イエスは何も言いませんでした。弟子たちがかのじょを追い払おうとすると、イエスはこう答えます。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」。イスラエルの家の失われた羊というのは、イスラエルの家系に属する民族、同じ信仰をもつ者のことです。叫んでいる女性はカナン人なので、イエスが言うくりに属する者ではありません。カナン人は、偶像崇拜をして、神に逆らう人々であると理解されていました。神さまへの信仰も、それに基づく生活習慣も、イエスたちとは全く異なるものでした。カナン人とイスラエル人との間には、宗教という大きな壁があったのです。

イエスは、長い歴史の中、ひどい苦しみのうちにおかれたイスラエルの人々を救い出すために、イスラエルの神から送り出された救い主です。しかもその苦しみの歴史の中には、カナン人から受けた苦しみがあり、またその一方でイスラエル人がカナン人に与えた苦しみもあり、この場面の背景にはそうした思いが入り混じっていたのかもしれませんが。イスラエル人とカナン人は犬猿のなかでした。だから弟子たちは追い払おうとしたのかもしれませんが。この人はカナン人だから、自分たちの信じる神さまのことを話しても話が通じない。伝わらない。どうせ信じてもらえない。そう思ったのかもしれませんが。信仰を別にする人が、突然叫びながら現れたのです。それも、同じように神さまを信じてはいないのに、イエスに助けを求めている。弟子たちはこの人を見て、おかしな言動をとる人があらわれたと思ったかもしれません。

### ◎イエスを見上げる

この人の娘は病気でした。悪霊に取り憑かれて苦しんでいるのだといいます。それは、心の病のような病気であったのかもしれませんが。そのような病気の原因は、とりついた悪霊や、その人の犯した罪とされていました。おそらくこの人は、イエスの元を訪れる前にも、他の人に助けを求めてきました。自分の民族で信じている神々にも祈りました。医者や精神科にも行きました。占い師や霊媒師といった人々にも、「娘を助けてください」と頼み、頭を下げ続けてきました。しかし、あらゆる手段を尽くしても、娘の病気は治りませんでした。だから、イエスのもとに来たのです。藁にもすがる思いで、しかし、この人ならもしかしたら娘を癒してくれるか

もしれないと、かすかな希望をしっかりと抱いてイエスのもとに来たのです。

イエスははじめ、この人を無視しました。眼中になかったのです。しかしこの人はイエスの進もうとする目の前に出てきてひれ伏して言いました。「主よ、どうかお助けください」。イエスはかのじょを無視して前に進むことができない状況になります。そしてイエスは再び口を開き、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」と言いました。「子供たち」とは、イスラエルの神さまに守られ愛されている人々、神さまの子どもたち、つまり自分たちイスラエルの民のことで、パンとは神さまが与えてくださる恵みを意味しています。その恵みを、小犬には与えることはできないと言うのです。イスラエルの民が神の子どもたちであるとする時、カナンのはもはや人ですらない、小犬なのだと言われました。イエスはあまりにも冷たく、憐れみがないと思われるような言葉を放ったのです。

女性は引き下がらずに、このように言います。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」この女性は、虐げられるように小犬と言われても、それをひどいことだと訴えたりあらがったりすることはしませんでした。「主よ、ごもつともです」とイエスたちより身分が低いとされたことを受け入れ、自ら下の立場へとへりくだり、そこでなお、恵みを求めるのです。たとえ小犬であったとしても、主人の食卓からこぼれ落ちたパン屑はいただいても良いのだと。イエスの目の前に来てひれ伏し、たとえ立場は低いとしても、たとえ人と犬との違いがあったとしても、たとえ弱く小さな小犬であったとしても、主人に飼われている、生活の場を共にしている生き物なのだと言えらるるのでした。イエスはそれを聞くと、初めてかのじょを受け入れました。「あなたの信仰は立派だ。あなたの願い通りになるように。」この時、弟子たちとイエスの前にあらわれた女性が、信仰も習慣も異なるこの女性が、イエスの答える言葉を変えたのでした。

## ◎神さまの恵み

主人と、子供たちと、小犬。恵みのパンをめぐるイエスが示したこのたとえに、この人は自ら入り込み「そこには食卓から落ちるパン屑がある」と訴えました。この箇所ですぐ後には、「四千人に食べ物を与える」と見出しがつけられた話がでてきます。イエスがパンを裂いて配ると、集まった大勢の人のもとにパンが行き渡り、余ったパン屑で7つのかごがいっぱいに満たされたという話です。イエスが人々と分け合ったパンが大勢の人の手に渡ったように、神さまの恵みはイエスを通して、求める全ての人に渡されるのです。7という数字には、完全である、充分であるという意味があります。あまったパン屑が7つのかごを満たしたように、神さまが人々に与えた恵みは、全ての人に分け与えてもなお、余るほどにたくさんあるのです。充

分にあるのです。足りないということはないのです。

今日の箇所で、イエスが言う「子供たちのパン」も、さらに女性が語る「主人の食卓から落ちるパン屑」も、神さまから与えられた恵みです。この人は、子供たちのパンと言われたものを奪い取って自分のものにしようとしているではありません。神さまの恵みは、有り余るほど充分にあるではないか、子供でなくても、主人でなくても、人間でなくても分け与えられてもいいではないか、そう訴えたのでした。愛する娘のために必死に助けを求め、必死に恵みを求め、イエスの足元にひれ伏し、イエスの顔を見上げて訴えるその人の姿が、イエスの心を揺り動かしたのです。

◎イエスを見下ろす -遠藤周作『沈黙』-

遠藤周作の『沈黙』という物語のなかで、日本に宣教に来た、あるカトリック司祭の思いがこのように記されています。

「司祭は人々の多くの足に踏まれたその顔に、自分の顔押し当てたかった。踏み絵の中のあの人は 多くの人間に踏まれたために摩滅し、へこんだまま司祭を悲しげな眼差しで見つめている。その眼からはまさにひとしずく涙がこぼれそうだった」

ここには、人々の足元に立ち、低いところから人々を見上げるイエスの顔が描かれています。それは、日本のキリスト教弾圧の時代にあって、足元に踏み絵を置かれ、司祭が見つめたイエスの顔でした。イエス・キリストの顔の絵を踏まない者は、日本の役所に逆らう者であるとして処刑されていくのでした。

「踏み絵の中のあの人は 多くの人間に踏まれたために摩滅し、へこんだまま司祭を悲しげな眼差しで見つめている。」イエスは足元から司祭を見上げ、悲しげな眼差しで司祭を見つめるのです。踏まれることが悲しいではありません。これまで、イエスを信じる信仰を持った沢山の人が、苦しみながら、心に痛みを覚えながら、その足元のイエスの顔を見つめてきたのです。そして生きるために、あるいは自分の家族や友人を生かすために、悲しみながら、涙を流しながらその顔に足をかけた人が沢山いたのです。その人々の悲しみを、共に背負ったイエスの顔なのです。悲しい顔で自分を見つめる、人々の痛みがうつし出された踏み絵の中のイエスがこの時、悲しい顔で司祭を見つめていたのです。

イエスの声が司祭の心に響きます。「私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛みを分かたために十字架を背負ったのだ」。立場が弱いとされている人、身分の低い人と共に生き、自らへりくだる。自ら弱い者となる。生涯そうした歩みをなしてきたイエスだから

こそ、悲しい眼差しで自分を見つめる人々の痛み、悲しみを共にしてくださるのです。痛む心を抱きながらイエスを見下ろす司祭の顔を、足元から見上げ、悲しげな眼差しで見つめ返すのです。

### ◎へりくだる

私たちがその眼差しに感じるものは、神さまの恵みを食卓の上で独占する主人ではなく、自分の家族だけでパンを分けようとする子どもではなく、それを求める全ての人と恵みを分かち合おうと、自らへりくだるイエスの姿ではないでしょうか。イエスの目の前に立ちただかるように現れ、足元にひれ伏して恵みを求めた人を前にして、イエスは感心して言われました。「あなたの信仰は立派だ」と。カナンの中の信仰は、イエスや弟子たちの共有する者とは違いました。他の神々に助けを求め、あらゆる宗教に助けを求め、あらゆる手段を尽くしても未だ治らない病気の娘を憐れみ、悲しみ、しかし希望を捨てることをせずに、イエスの前に現れた。決して敬虔な信仰と捉えられるものではなかったかもしれません。おかしい人だと思われるような言動をしていました。それでもイエスを見つめるかのじょの眼差しは、悲しみの眼差しでありながら、希望の眼差しでもあったのです。

イエスはその悲しみも、また希望をも、受け止めてくださったのです。「あなたの信仰は立派だ」とイエスが言われた時、イエスもまた、ひれ伏すその人と同じように地面に膝をつき、その人の顔を上げさせ、視線を同じにして、この言葉を言われたのではないかと私は思うのです。神さまの恵みとして分け与えられる希望を確信して求める心を、その信仰を、立派だと言われました。あなたは強い心で神の恵みを信じている、あなたの言う通りだと言われたのです。そして自分に向けられた悲しみと希望の眼差しを受け止め、その悲しみと希望の眼差しでかのじょを見つめ返した、その時、娘は癒されました。「癒される」ということは、共に悲しむ者がいるということなのです。母親の悲しみを共にし、娘の苦しみに思いを向け、共に痛む者がいるということなのです。聖書には「病気が治った」とは書いてありません。ただ、イエスによって娘も母親も癒されたのです。

### ◎イエスを見つめる

讃美歌21の197番「ああ主のひとみ」には、1節から3節に、それぞれイエスが目の前にいる人を見つめる姿が描かれています。

1節にあるのは、自分の元から去っていく若者を見つめて嘆くイエスの姿です。

「ああ主のひとみ、まなざしよ、きよきみまえを 去りゆきし

富める若人 見つめつつ、 なげくはたれぞ、主ならずや。」

2節と3節には、イエスの弟子でありながら不安にかられてイエスを否定してしまうペトロ、イエスの復活を信じられないトマスを見つめるイエスの眼差しが歌われています。4節に描かれているのは、私たちに向けられたイエスの眼差しです。

「きのうもきょうもかわりなく、 血しおしたたるみ手をのべ、

『友よかえれ』と まねきつつ 待てるはたれぞ、主ならずや。」

私たちが生きるこの今も、主イエスの眼差しが私たち一人ひとりに向けられているのです。全ての人の悲しみ、苦しみを負い、全ての人の傷を代わりに背負い、いまなお私たちを愛しておられるイエスは、私たちの前に立ち、傷つけられて十字架にかけられた。その傷ついた手を差し伸べて、招いておられるのです。待っておられるのです。

私たちの救い主イエスは、悲しい時、泣きそうな時、共に目に涙を浮かべて悲しんでくださる方です。地面にひれ伏すしかないほど弱い立場にある時、低い地位に落とされた時、同じところまでへりくだって、弱くなってくださる方なのです。そして嬉しい時、喜びにあふれた時、共にほほえんでくださる。希望を抱いている時、その希望を共にしてくださるのです。

今、イエスはどのような眼差しを向けて招いておられるのでしょうか。神さまの限りない恵みを心に留め、一人ひとりの前に差し出されたその手を取り、イエス・キリストの招きに応える私たちでありたいと思います。